

*** 検流計 D.C.GALVANOMETER 収蔵**

写真1、2の計器の存在はずっと以前から気づいていて、これは電気計器の1種であることはわかっていたが記事にしていなかった。まず現物を見て GALVANOMETER と読んでもピンと来ないし、姿かたちから電気計器に見えないのである。



写真1



写真2

写真で見ても、どちらが前かもよくわからないが、写真2の窓の方から見るのであろう。名盤を見ると電気計器のメーカーとしては「YEW」マークで有名な横河電機の製品である。名盤が写真3である。書かれているのは、

YEW D.C.GALVANOMETER
TYPE : G-3B
SENSITIVITY $8.2 \times 10^{-10} \text{A}$ $0.6 \times 10^{-6} \text{V}$
EXT.CRIT.DAMO.R. 1000 Ω
COIL R. 113 Ω PERIOD 8.3 SEC
NO.656C3 1956

YOKOGAWA ELECTRIC WORKS,LTD

と読めるが、写真3のように非常に読み取りにくい。

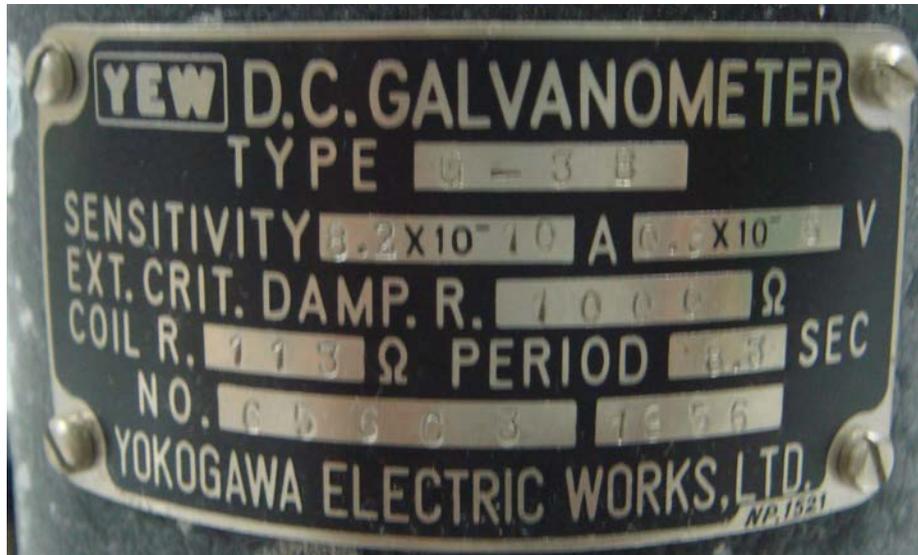


写真3 名盤

立派な箱入り（写真4）である。写真5は箱から出したところである。



写真4



写真5

写真5の箱の中の封筒には乾燥剤のシリカゲルが入っていた。この封筒（写真6、7）も歴史を感じさせるものである。切手は8円切手が貼ってある。普通郵便が現在は82円だが、当時は8円の時代である。当時横河電機のは太陽社という会社が代理店であった。オリエントアルモーターというのも懐かしい。箱の中には1KΩの抵抗が入っていた、写真7の封筒の左に写っているものだが、写真8である。



写真6 シリカゲルの入った封筒の一つ

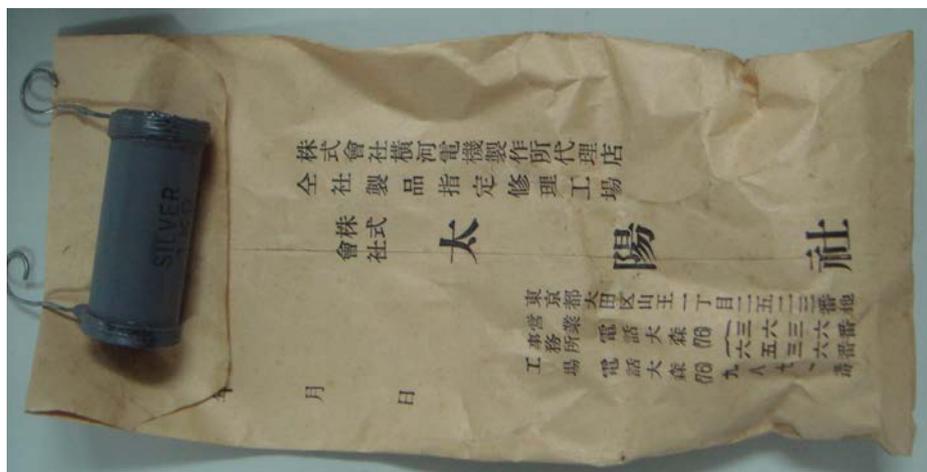


写真7 シリカゲルの入った封筒 左に1KΩの抵抗



写真8 1KΩの抵抗

この検流計の製造年は、名盤の刻印から 1956 年である。検流計なら指針の針があるはずだと思ったが、そのようなものはない。窓の中をよく見ると直径 1 cm 程の鏡が見える (写真 9)。電流でできる磁場で回転する軸に取り付けられた鏡が回る角度で電流の強さを測る仕掛けらしい。この検流計の 3 本の足の 1 本に水準器がついている (写真 10)。この検流計は水平に置かれて測定するようだ。また、筒の先端には ZERO ADJUSTER (写真 11) と書かれており、これを回すことによって鏡の反射位置の初期値を設定するようである。写真 10 に見える CLAMP RELEASE は鏡のクランプと可動の意味と思われる (写真 12)。

筆者のこの機器を見ての所見を書いたが見当はずれがあるかもしれない。電流計の針が振れる以前のものらしいこと、様々な工夫が凝らされていることで、素晴らしい国立天文台に残った歴史遺産だと思われる。



写真 9 指針の役目の鏡



写真 10 足の 1 本にある水準器



写真 10 反射鏡の 0 値設定



写真 11 鏡の駆動の ON-OFF

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp